

## 日本地域におけるコメツキムシ科の分類学的覚書 (III)\*

鈴木 亙\*\*

(10) *Corymbites mundulus* LEWIS と *Corymbites japonicus* FLEUTIAUX について

*Corymbites mundulus* は、LEWIS によって Kii と Yamato で採集された個体数不明の標本に基づいて LEWIS (1879) によって記載された 8 mm 程度の暗褐色で扁平なコメツキムシである。このコメツキムシは、その後、LEWIS (1894) によって再び日本の各地から記録され、簡単な再記載がなされたが、その中に「.. The type of this species has an aeneous tinge, but in a series of eighteen specimens I do not observe another with this colour..」と記されたことから、aeneous tinge を持つ個体は例外的に考えられ、FLEUTIAUX が 1902 年に記載した *Corymbites japonicus* という近縁種と後に混同される原因となった。

両種は、その後 SCHENKLING (1927) のカタログの中で *Selatosomus* 属に移されたが、どういう訳か *japonicus* の方は、同じカタログの中で二重に引用され、*Hypoganus* 属のものとしても扱われた。MIWA (1929, 1933, 1934) は、台湾農業試験所所蔵の LEWIS の標本(素木標本)を基に、*mundulus* を再び *Corymbites* 属にもどしたが、*japonicus* については、調査することができず、SCHENKLING (1927) の *Hypoganus* の扱いをそのまま引用している。

岸井・大平 (1956) は、*Corymbites mundulus* LEWIS を *Calambus* 属に移し、「*Corymbites japonicus* FLEUTIAUX, 1902 の記載は本種に酷似し [*mundulus* の] synonym かも知れ

ぬ」と指摘した。その後、大平 (1969) は、FLEUTIAUX の *japonicus* の 1 つの syntype (?) を調査し、その syntype 標本が *mundulus* と同じ種であることを明らかにし、*japonicus* を *mundulus* の junior synonym にした。大平・鈴木 (1985) は、従来クロツヤヒラタコメツキという和名で知られていた種の中に、実は 2 種のコメツキムシが混入していることに気づき、不明種 *Calambus* sp. として記録した。

以上が 2 種のこれまでの主な分類学上の取り扱いであるが、ごく最近になって KISHII (1987) は、FLEUTIAUX の原記載などから判断して、大平・鈴木 (1985) の *Calambus* sp. に対し *japonicus* の学名を当てた。

これまでの調査から判断すれば、大平 (1969) が FLEUTIAUX の syntype 標本を直接比較検討して *mundulus* の synonym としているので、大平・鈴木 (1985) のいう *Calambus* sp. は、新種ということになり、新名を与えなくてはならないことになるのだが、ここで問題が 1 つ生じたのである。それは、FLEUTIAUX が原記載に用いた標本は、大平 (1969) が見た標本だけではなく、別にも存在し、その標本は、なんと大平・鈴木 (1985) がクロツヤヒラタコメツキ *Calambus* sp. とした種と同種であることが明らかになったのである (図 26)。このように syntypes の中に 2 種以上の種が混入している場合、原記載の内容に最も一致した個体をその種の lectotype に指定して整理することが望ましいが、2 つの syntypes 共に FLEUTIAUX の *japonicus* 原記載によく一致し、



図 25. チャグロヒラタコメツキの後模式標本(大英博物館所蔵)。*Calambus mundulus* (LEWIS), lectotype (in coll. Brit. Mus. Nat. Hist).

\* Taxonomic notes on the Far Eastern Elateridae (Coleoptera) (III)

\*\* Laboratory of Entomology, Tokyo University of Agriculture, Sakuragaoka, Setagaya-ku, Tokyo 156, Japan

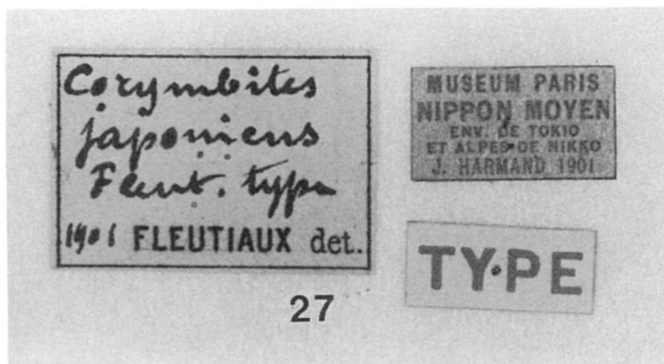


図 26. クロツヤヒラタコメツキの後模式標本 (パリ自然史博物館所蔵). *Calambus japonicus* (FLEUTIAUX), lectotype (in coll. Museum National d'Histoire Naturelle, Paris).

図 27. クロツヤヒラタコメツキの総模式標本のラベル. Labels of a syntype of *Corymbites japonicus* FLEUTIAUX.

原記載から種の判別をすることは、きわめて難しい。原記載の黒色で光沢があるという点では、2つの syntypes のうち、大平・鈴木 (1985) が *Calambus* sp. とした種と一致した syntype によく似ている。幸い、筆者が調査することのできた syntype 標本 [= 従来、クロツヤヒラタコメツキという和名で知られていた種] には、FLEUTIAUX 直筆の同定ラベルに type\* と小さく記されているので、こちらの標本を *japonicus* の lectotype として指定し、今後の混乱を避けたい。

以上のようなことから、従来 *mundulus* の synonym として知られてきた *japonicus* は、KISHII (1987) のように独立種として扱いたい。これら 2 種の学名を整理すると次のようになる。

*Calambus mundulus* (LEWIS, 1879) チャグロヒラタコメツキ (図 25)

*Corymbites mundulus* LEWIS, 1879, Ent. month. Mag., 16: 157. (Kii, Yamato) [examined].—LEWIS, 1894, Ann. Mag. nat. Hist., (6), 13: 262 (Yokohama, Kii, Miyanoshita, Oyama, Oyayama, and Hagi) (part) [examined].—MIWA, 1933, Mushi, Fukuoka, 6: 73 (Mt. Daisen).

*Selatosomus (Selatosomus) mundulus*: SCHENKLING, 1927, Coleopt. Cat., pars 88 (Elateridae II): 379.

*Corymbites (Paranomus) mundulus*: MIWA, 1934, Dept. Agr., Gov. Res. Inst., (65): 123, pl. 6, fig. 8. (Hokkaido: Sounkei, Sapporo; Honshu: Komaba, Oyama, Ki-

\* FLEUTIAUX は、原記載の中で holotype を指定することをほとんどしなかったが、原記載で主に用いた 1 つの syntype の標本に必ず type とラベルに記している (図 27)。

ga; Kyushu: Oyayama).

*Calambus mundulus*: ÔHIRA, 1962, Morphological and taxonomic study on the larvae of Elateridae in Japan (Coleoptera), p. 86-87, pl. 33 (Tokyo, Aichi)—ÔHIRA, NAKAMURA & ÔSAWA, 1971, Miscell. Rep. Hiwa Mus. nat. Hist., (14): 12, pl. 2, fig. F. (Hiroshima)—ÔHIRA & SUZUKI, 1985, Coleoptera of Japan in color, 3: 69; KISHII, 1987, A Taxonomic study of the Japanese Elateridae (Coleoptera), with the keys to the Subfamilies tribes and genera, p. 107.

分布: 日本 (北海道, 本州, 九州)。

LECTOTYPE (here designated), ♀ (?) (fig. 25), with the following inscription on five labels: "Wada Ki. 79"; "*mundulus* Lewis Type"; "Japan. G. Lewis 1910-320."; "SYNTYPE"; "Type H.T." (in coll. Brit. Mus. Nat. Hist.; Elateridae box no. 397).

Other material examined. 1♂, Tokachionosen, Hokkaido, 4. v. 1938, T. SAWAMOTO Leg.; lex., Sapporo, Hokkaido, 11.x. 1937, H. KONO Leg.; 1♀, Mt. Fukiyayama, Monden V., Kita-Aizu, Fukushima Pref., 12.v. 1950, Y. KUROSAWA Leg.; 2 exs., Mt. Ohyama, Kanagawa Pref., 19. iii. 1972, Y. KUROSAWA Leg. (in coll. Natn. Sci. Mus., Tokyo).

*mundulus* の学名に対して以前にクロツヤヒラタコメツキの和名が当てられたこともあったが、*japonicus* と混乱していた時代に、*japonicus* に対して付けられた和名であるので、*mundulus* に対しては、その色彩の特徴を基にチャグロヒラタコメツキと付けられた (大平・鈴木, 1985)。

*Calambus japonicus* (FLEUTIAUX, 1902)

クロツヤヒラタコメツキ (図 26, 27)

*Corymbites japonicus* FLEUTIAUX, 1902, Bull. Mus. Hist. Nat. Paris, 8: 22 (Japon central). (fig. 26, 27) [examined].

*Selatosomus* (*Selatosomus*) *japonicus*: SCHENKLING 1927, Coleopt. Cat., pars 88 (Elateridae II): 376.

*Hypoganus japonicus*: SCHENKLING, 1927, Coleopt. Cat., pars 88 (Elateridae II): 403.

*Hypoganus japonicus*: MIWA, 1934, Dept. Agr., Gov. Res. Inst., (65): 125.

*Calambus mundulus*: LEWIS, 1894, Ann. Mag. nat. Hist., (6), 13: 262. (Yokohama, Kii, Miyanoshta, Oyama, Oyayama, and Hagi) (part)—NAKANE 1963, Icon. ins. japon. Col. nat. ed., 2, p. 159, pl. 80, fig. 10 [misidentification]—KISHII & ÔHIRA, 1956, Akitu, Kyoto, 5: 73 (Niigata) [misidentification]—BABA & ÔHIRA, 1967, Trans. Ent. Soc., Niigata, (37): 17, 20. (Niigata) [misidentification]—ÔHIRA, 1969, Kontyû, Tokyo, 37: 57-58. [misidentification].

*Calambus* sp.: ÔHIRA & SUZUKI, 1985, Coleoptera of Japan in color, 3: 69, pl 12, fig. 12.

*Calambus japonicus*: KISHII, 1987, A taxonomic study of the Japanese Elateridae (Coleoptera), with the keys to the subfamilies, tribes and genera, p. 107.

分布: 日本 (北海道, 本州, 四国, 九州, 隠岐), 樺太.

LECTOTYPE (here designated) (fig. 26), sex unidentified, with following inscription on three labels (fig. 27): "MUSEUM PARIS NIPPON MOYEN ENV. DE TOKIO ET ALPES DE NIKKO J. HARMAND 1901"; "*Corymbites japonicus* Fleut. type 1901 FLEUTIAUX det."; "TYPE" (in coll. Mus. Natn. Hist. nat., Paris).

Other material examined. 1♂, Mt. Amagisan, Shizuoka Pref., 20. v. 1956, S. TSUYUKI leg.; lex., Izuhara, Tsushima Is., NAGASAKI Pref., 5. vi. 1969, T. NAKANE leg. (in coll. Natn. Sci. Mus. Tokyo).

本種の和名は、前種の *mundulus* と混乱していた時代に本種に対して付けられたものなので、学名が *japonicus* と変わっても和名はそのまま残した。

(11) 三輪博士によって台湾から記録された *Penia eschscholtzii* (HOPE) というコメツキムシの正体

MIWA (1928) は、台湾の Koshun (恒春) で素木得一博士によって採集された (とされる) 1個

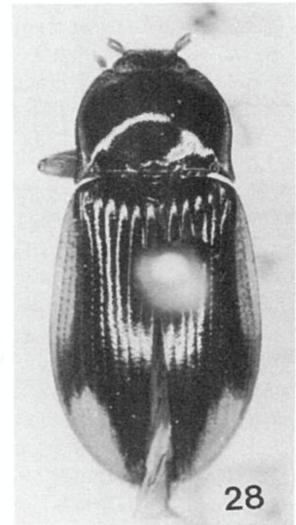


図 28. 三輪博士によって台湾の恒春から記録されたムクゲセマルコメツキの標本。The specimen which was recorded from Taiwan, by Dr. MIWA as *Penia eschscholtzii* (HOPE).

体のコメツキムシに対し、それまでネパール特産であった *Penia eschscholtzii* (HOPE) の学名をあてて台湾から記録した。その後、本種は MIWA (1931 a, 1931 b, 1934) の論文の中で再三取り上げられたが、先の素木博士の標本を引用するにとどまり、まったくその正体については不明であった。

筆者は、以前より本種がネパール中部の山地と台湾の低地に飛び離れた分布をしていることに疑問を感じていたが、台湾の分布を否定する証拠もなく、そのままになっていた。一昨年、台湾省農業試験所を訪ねた折りに、MIWA (1928) が Koshun から記録するのに使用した標本がないものかと注意していたところ、幸運にもその標本を見つけ出すことができた。この個体は図示したような形態を呈し、上翅の前方と後方にあわせて四つの黄色紋を有するという特徴のあるものであった (図 28)。しかし、HOPE (1831) がネパールから記載するのに用いた基準標本では、上翅の後方に2つの黄色紋しかなく、台湾の個体はまったく異なる新種であることが明らかになった。ところが、ここでもう1つの疑問が出てきた。素木博士が Koshun (恒春) で採集されたとされる個体とまったく同じ種がダーズリン地方の限られた地域だけに生息していることである。先にも述べたように、本種がこのような隔離分布をしているとは、どうも考えにくい。とくに、*Penia* 属に所属するコメツキムシは、狭い地域での種分化が激しいという特徴がある。そこで、考えられることは、素木博士が採集したとする標本のデータに誤りがあるのではないかということである。

黒沢 (1980) によれば、素木博士はロンドン留学から帰国するに際して、東南アジア地域の甲虫の標本を台湾に持ち帰られ、標本の地名を示すラベルは、素木博士によって帰国後すべて外され、その代わりに台湾のある特定の産地を示すラベルに付け替えられたという。たとえば、インド産のものには恒春、

ボルネオ産のものには紅頭嶼というぐあいに統一して付け替えがおこなわれたらしい。このような事実があったことから判断すると、恒春で採集されたとされるこの標本も素木博士によって大英博物館から台湾に持ち出された、いわゆる「素木標本」の 1 つで、実はインド産の標本であったと考えて間違いないだろう。

三輪博士は、台湾省農業試験場所蔵の標本（素木博士が大英博物館から持ち帰られた標本）に基づいて、インド、フィリピン、ニュージーランド地域に棲息する多くの種を記録したが、いわゆる「素木標本」の存在を後になって気づかれたらしく、「これらの標本が Kotosho や Rono から本当に採集されたのかどうかきわめて疑わしい」として、台湾からの分布をほとんど除外しておられる (MIWA, 1930)。 *Penia eschescholtzii* については、台湾に近縁なグループが分布していることからか、三輪博士も気がつかれなかったようである。

なお、ここで明らかになったインド・ダージリン産の未記載種については、別に報告したいと考えている。

#### *Penia* sp. n. ムクゲセマルコメツキ (図 28)

*Penia eschescholtzii*: MIWA, 1928, *Insecta Matsum.*, Sapporo, 3: 38 (Koshun)—MIWA, 1931, *Trans. nat. Hist. Soc. Formosa*, Taihoku, 22: 73 & 94 (Koshun)—MIWA, 1931, *Dept. Agr., Gov. Res. Inst. Formosa*, Taihoku, (55): 141 (Koshun)—MIWA, 1934, *Dept. Agr., Gov. Res. Inst. Formosa*, Taihoku, (65): 228 (Koshun) [misidentiffation].

分布: インド (ダージリン地方)。

Material examined. *lex.*, Koshun, viii. (in coll. Taiwan Agricultural Institute, Taichung; Elateridae box no. 26); 1♂1♀, Singla, Darjeeling District, India, 2. v. 1981, M. Iro leg.; 3♀♀, Manjitar, Darjeeling District, India, 7.v. 1981, M. Iro leg.

#### 謝 辞

本文を草するにあたり、国立科学博物館所蔵のコメツキムシの調査を許された黒澤良彦博士と大和田守博士、貴重な標本をご恵与下さった伊藤正雄氏と露木繁雄氏に厚くお礼申し上げる。

#### Summary

In the present paper, three Oriental species of the family Elateridae are dealt with. The specimen which was recorded as *Penia eschescholtzii* (HOPE) from Taiwan by MIWA (1929) is examined. The type series of *Corymbites mundulus* LEWIS, 1894 and *Corymbites japonicus* FLEUTIAUX, 1902, are examined and their lectotypes are designated.

10) ÔHIRA (1969) treated *Corymbites japonicus* FLEUTIAUX as a synonym of *Calambus mundulus* (LEWIS), but examination of the type material (lectotypes designated here) of the two species has shown that both were different species.

11) The specimen which was recorded by MIWA (1928) as *Penia eschescholtzii* (HOPE) from Koshun, Southwestern Taiwan, is probably collected in Darjeeling, India. It is one of the SHIRAKI's specimens which were transported from the British Museum (Nat. Hist.) to the Department of Agriculture, Government Research Institute, Taihoku, by the late Dr. SHIRAKI.

#### 参 考 文 献

- 馬場金太郎・大平仁夫, 1967. 新潟県のコメツキムシ科について. 越佐昆虫同好会会報, (37): 2-40, 2 pls.
- FLEUTIAUX, E., 1902. Deuxieme liste de Cicindelidae, Elateridae et Melasidae (Eucnemidae), recueillis au Japon par M.M. HARMAND. *Bull. Mus. Nat. Hist. Nat. Paris*, 8: 15-25.
- KISHII, T., 1987. A taxonomic study of the Japanese Elateridae (Coleoptera), with the keys to the subfamilies, tribes and genera. 262 pp. + 12 pls. Heian High School, Kyoto.
- LEWIS, G., 1879. Diagnoses of new Elateridae from Japan. *Ent. month. Mag.*, 16: 155-157.
- MIWA, Y., 1931. Elateridae of Formosa (V). *Trans. nat. Hist. Soc. Formosa, Taihoku*, 22: 72-98.
- 三輪勇四郎, 1933. 九州帝國大学農学部昆蟲學教室所蔵の叩頭蟲標本 (II). *Mushi, Fukuoka*, 6: 66-73.
- 大平仁夫, 1962. 日本産コメツキムシ科の幼虫の形態学的ならびに分類学的研究. 179 pp. + 61 pls. 大平仁夫自刊.
- ÔHIRA, H., 1963. New or little-known Elateridae from Japan, VI (Coleoptera). *Trans. Shikoku ent. Soc., Matsuyama*, 8: 15-18.
- 大平仁夫, 1969. 日本産コメツキムシ科の知見 (III). *Kontyû, Tokyo*, 37: 56-60, pl. 2.
- 大平仁夫・中村慎吾・大沢省三, 1971. 広島県のコメツキムシ. 比和科学博物館研究報告, (14): 6-18, 2 pls.
- 鈴木 互, 1987 a. 日本地域におけるコメツキムシ科の分類学的覚書 (I). 甲虫ニュース, (75/76): 1-8.
- 鈴木 互, 1987 b. 日本地域におけるコメツキムシ科の分類学的覚書 (II). 甲虫ニュース, (77): 1-7. (東京農大)

ゲンゴロウ類の分布に関するメモ

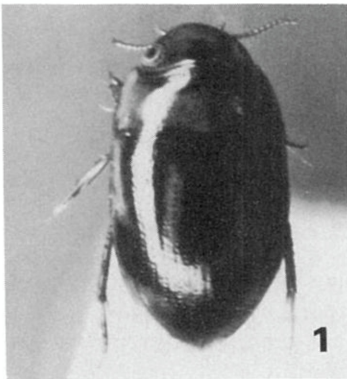
阿部光典

ゲンゴロウ類の中で「稀種」といわれているものについて最新の知見をメモしておく。

1. キボシチビコツブゲンゴロウ *Hydrocoptus (Neohydrocoptus) bivittis* MOTSCHULSKY

このゲンゴロウは、国外では台湾・中国南部・東南アジアに広く分布しており、体長約3mm、上翅に長楕円形の黄色紋をもつ美しい種である。日本では、愛知県知多半島河和町に散在する多くの池のうちの一つで、1962年に発見され、佐藤(1984)によって日本新記録種として報告された<sup>1)</sup>。発見以後、ごく少数の個体が採集されているのみであるが、いづれも同じ池からだけで、周辺の池からは得られていなかった。筆者は、この「大珍品」を静岡県で採集することができたので報告する。[写真1]

4頭、静岡県磐田市桶ヶ谷沼、11. vii. 1988、筆者採集。



この沼は周辺が大きな湿原になっており、トンボの多産地として有名である。この種は湿原部分では発見できず、沼の岸にできた floral zone で得た。なお、この沼には、一般的に少ないといわれているムツボシツヤコツブゲンゴロウ *Canthydrus politus* (SHARP) が無数に生息している。また、オオマルケシゲンゴロウ *Hydrovatus bonvouloiri* SHARP やマルケシゲンゴロウ *Hydrovatus subtilis* SHARP も少数ながら発見できる。

この湿原の一部は、すでに埋め立てられており、宅地造成が済んでいる。隣接地にゴルフ場を建設する計画もあるという。工場や住宅が建てられれば、工業・生活排水の流入によって水生昆虫は壊滅的打撃をうけるであろう。

2. ナガチビゲンゴロウ *Uvarus tokarensis* M. SATÔ

この種は琉球トカラ中之島で発見された2個体にもとづき、佐藤(1972)が記載したものである。記載以後、15年間、再発見されなかったが、筆者は1987年、石垣島で採集した。

2頭、沖縄県石垣市名蔵、20. xii. 1987、筆者採集。

なお、奄美大島でも、松井(1988)により、多数の個体が得られている<sup>2)</sup>。

3. マルチビゲンゴロウ *Clypeodytes frontalis* (SHARP)

昔は各地で採れたようであるが、近年、その数は激減し、大珍品となった種である。

9頭、福島県いわき市藤間沼、15. v. 1988、佐藤淳採集；2頭、同地、29. vii. 1988、筆者採集。茨城県では内原町の記録(1頭)がある<sup>3)</sup>。

4. シマケシゲンゴロウ *Coelambus chinensis* (SHARP) [写真2]

北海道から中部地方にかけて分布する種であるが、個体数が非常に少なく、まれに生息地が見つかったとしても、1~2頭しか採れないといわれていた。北海道では比較的個体数が多いようである。記録のない珍品なので報告しておく。

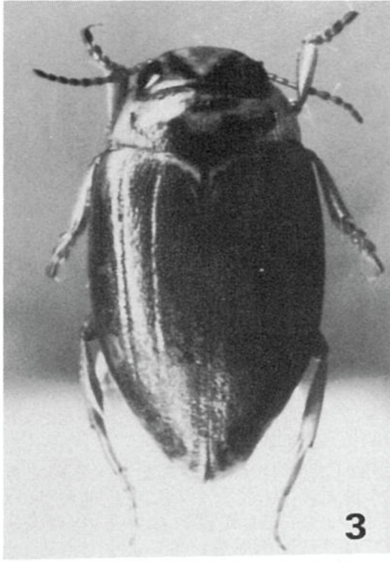
1頭、千葉県長生郡一宮町、28. vii. 1985、久保浩一採集。1頭、福島県いわき市藤間沼、15. v. 1988、佐藤淳採集；14頭、同地、29. vii. 1988、筆者採集。26頭、栃木県藤岡町篠山渡良瀬遊水池、8. viii. 1988、筆者採集；64頭、同地、10. viii. 1988、筆者採集。24頭、東京都荒川区東尾久、14. viii. 1988、筆者採集；31頭、同地、15. viii. 1988、筆者採集。



茨城県の記録については大桃(1987)が報告している<sup>3)</sup>。

5. カノシマチビゲンゴロウ *Oreodytes kanoi* (KAMIYA) [写真3]

1938年にこの種が神谷によって記載されて以来、長年にわたって長野県上高地の記録しかなかったが、最近、高桑が福島県南会津郡松枝岐村<sup>4)</sup>、および新潟県妙高高原町<sup>5)</sup>での記録を報告した。また、未発



表ではあるが、石川県、長野県（伊那市）、および山梨県（芦安村）でも採れているようである。さらに北海道各地での記録も松本（1987）によって報告されている<sup>6)</sup>。筆者は山梨県塩山市の近くでこの種を発見したので報告する。

26 頭、山梨県東山梨郡牧丘町焼山林道（標高 1400 m）、2. vii. 1988, 筆者採集；同地、6. vii. 1988, 筆者採集。

溪流の岸沿いにできた、水深 15 cm くらいの、淀みの底（泥質）で、静止しているか、またはゆるやかに泳いでいた。しかし、おどろくと、かなりの速度で泳ぎ回り、相当速い流れの中でも上流に移動していた。北海道産の個体では上翅の縦じまが相互にはなれており、きれいなしま模様が認められるが、本州産のものでは縦じまが太く、相互につながって、全体が黒くみえる。

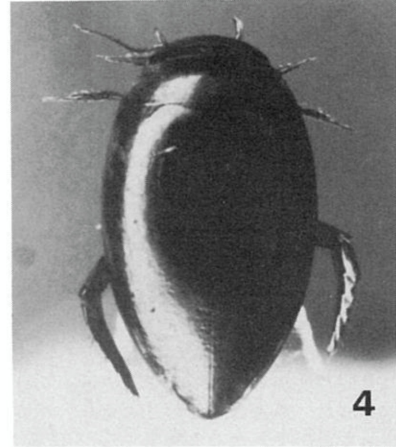
なお、焼山峠周辺では、一般的に少ないといわれているチャイロシマチビゲンゴロウ *Potamonectes anchoralis* SHARP が、採る気も失せるほど、多産する。現地はダム建設によって 3 年後には水没する予定である。

#### 6. コウベツブゲンゴロウ *Laccophilus kobensis* SHARP [写真 4]

「珍品」とはいえないと思うが、少ない種である。国内では本州・四国・九州に、国外では中国に分布することが知られていた。筆者はこの種を石垣・西表の両島で採集した。新分布である。

1 頭、沖縄県石垣市宮良、20~22. xii. 1986, 筆者採集。5 頭、同市名蔵、20. xii. 1987, 筆者採集。2 頭、同県竹富町（西表島）大富、17. xii. 1987, 筆者採集。

#### 7. エゾゲンゴロウモドキ *Dytiscus czerskii* ZAITZEV



北海道旭川市に在住してゲンゴロウ類の分布調査を精力的に進めておられる松本英明氏からの私信によれば「エゾゲンゴロウモドキの道内分布は道南部に限られており、その北限記録は後志支庁蘭越町である」との由であった。さらに「この種は、道内に広く分布しているゲンゴロウモドキ *D. dauricus* GEBLER と棲み分けているのではないか」という推論をしておられた。筆者は本年、知床半島を調査し、エゾゲンゴロウモドキを発見したので最北の記録として報告する。なお、この際ゲンゴロウモドキも同じ沼で採集できて、松本氏の推論は否定されることとなった。また、佐藤正孝教授のコレクションの中に飯島一雄氏が採集した標茶産のエゾゲンゴロウモドキが 1 頭ある。釧路地方にはゲンゴロウモドキも分布しているので両種は混棲していると考えて間違いないと思う。

9 頭、北海道網走支庁斜里町岩尾別、29. viii. 1988, 筆者採集。

このメモを記すにあたり、多くの方々の御力添えを頂いた。佐藤正孝教授、高桑正敏氏、松本英明氏からは貴重な情報を頂いたし、岩瀬和夫氏はシマケシゲンゴロウ（千葉県産）を恵与して下さった。標本の撮影は森田誠司氏をわずらわせた。佐藤淳君（筆者の甥）にはいわき市藤間沼の調査を手伝ってもらった。上記諸氏に心から御礼申しあげる。

- 1) 佐藤正孝 (1984) 甲虫ニュース, (65): 1-4.
- 2) 松井英司 (1988) 北九州の昆虫, 35 (2): 113-121.
- 3) 大桃定洋 (1987) おとしぶみ, (16): 27-33.
- 4) 高桑正敏 (1986) 月刊むし, (190):
- 5) 高桑正敏 (1987) 甲虫ニュース, (79/80): 9.
- 6) 松本英明 (1987) 月刊むし, (196):

(東京都大田区)

#### ◇ 原稿募集 ◇

原稿をお寄せ下さい。分類・生態・分布等に関するもので、長短を問いません。採集時の状況や採集方法なども書き添えて下さい。生態解明の一助となるでしょう。甲虫ニュースが愛好家諸氏のデータバンクとなることを願っています。 (世話人)

○東京都大田区における数種の甲虫の記録

筆者の居住する東京都大田区の甲虫については、大田区公害環境部公害対策課が1984年にまとめた報告書(大田区の昆虫)に、57科430種の甲虫が記録されており、又、和泉敦夫氏がしばしば本誌に報文を寄せられているが、筆者の採集したもののうち、興味深いと思われるいくつかの種について報告する。

1. ダルママグソコガネ *Mozartius testaceus* NOMURA et NAKANE

1頭, 鶴の木, 17. iv. 1982.

新幹線鉄橋に近い多摩川堤防上で、路傍に踏まれて半ば乾燥した状態の犬糞の下より採集した。同時にコマグソコガネ *Aphodius pusillus* 数個体を得たが、明らかに食糞の状態にあったコマグソに対し、ややはなれて静止していたダルママグソについては、食糞のために来集したものか、単に陽をさけてもぐり込んだものか判然とはしなかった。益本仁雄氏のご教示によれば、本種は関東地方(東京、神奈川、千葉)等で記録があり、落葉下などで採集されているが、個体数の少ないものとの事である。標本は益本氏が保管している。

2. ヒゲコガネ *Polyphylla laticollis* LEWIS

1♂, 鶴の木, 22. vii. 1978; 1♂, 1♀, 田園調布, 8. viii. 1982; 1♂, 田園調布, 24. vii. 1983.

この地域では古い記録もあり、稀な種でもないようだが、都区内の記録ということで報告する。多摩堤通りの車道の街灯に飛来し、車にはねられたものを拾うために、破損した個体が多い。

3. アオカナブン *Rhomborrhina unicolor* MOTSCHULSKY

1♂, 鶴の木, 7. viii. 1988.

本種も、都区内での記録はあるが、同属のカナブン、クロカナブンに比べ山地性が強く記録としては少ないと思われるので、報告しておく。自宅の庭に植えたミズナラの樹液にカナブンと一緒に来集した。

4. ホッカイジョウカイ *Wittmercantharis vulcana* (LEWIS)

2頭, 鶴の木, 3. v. 1980; 2頭, 田園調布, 15. v. 1982; 3頭, 下丸子, 27. v. 1984.

筆者が同定に使用した北隆館「原色昆虫大図鑑Ⅱ」では産地北海道とあり、新刊の保育社「原色日本甲虫図鑑Ⅲ」には北海道、本州となって居るが、和名の通り北方に偏った分布をしているものようである。この附近では、初夏の頃、河川敷の草地でよく見受けられる。上記はいずれもそうした環境で、日中好天の際はさかんに飛翔するほか、禾本科植物をスィーピングして得た。

(東京都大田区, 木村欣二)

○イトヒゲニセマキムシの岐阜県からの記録

イトヒゲニセマキムシ *Dasycerus japonicus* NAKANE は、微小なこともあってか、あまり記録は多くないようである。今回次のように採集できたので記録しておくたい。

1頭, 岐阜県揖斐郡根尾村水鳥谷, 16. viii. 1988. 朽木に生じた菌類に止っていたものである。

(岐阜県関市, 高井 泰)

○沖縄本島におけるイチジクカミキリの採集例追加

1988年10月、日本昆虫学会の大会が琉球大学で行われたので、これに出席するため沖縄に出かけた。会期中、大学のある西原よりやや北にある中城(なかぐすく)城址(中城村と北中城村にまたがって位置する)に採集のため訪れた。このとき城址の奥にあるガジュマルのかなり太い木の根もとに、昨年沖縄首里より記録のあった(竹内幸夫氏報告, 月刊むし196号, 36頁)イチジクカミキリ *Batocera rubus* LINNAEUS 1♂を発見、またその側には交尾中のもも見つけ、計3頭を得た。交尾中のものが見つかったことにより、本種が自然分布しているのは確実と思われる。ここに交尾していた雌雄の写真を示すとともに、採集データを記しておく。



2♂1♀, 沖縄本島: 中城村中城城址(標高100m), 1988年10月9日, 山崎柄根採集。

体色はいずれも黒色が強い。標本は東京都立大学自然史標本室に保管する。なお、竹内氏によれば、氏の報告以前にも二度記録があるという。

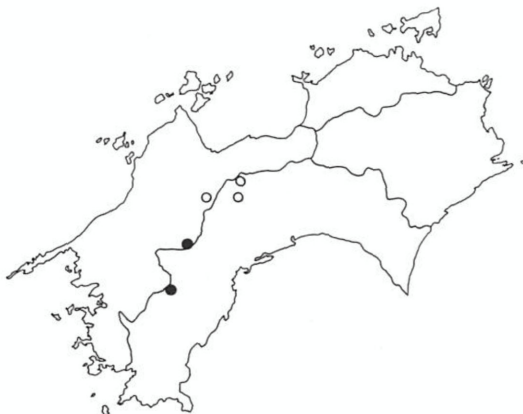
末筆ながら、文献についてご教示いただいた後閑暢夫・下村徹両氏には、ここに厚くお礼申しあげる。

(東京都立大, 山崎柄根;  
日本女子体育短大, 鈴木信夫)

## シコクヒラタナガゴミムシ四国西南部にも産す

シコクヒラタナガゴミムシ *Pterostichus* (*Sphodroferonia*) *miyamai* KASAHARA et ITÔ は、四国の石鎚山系鷹ノ巣山、奥南川山、面河溪で採集された個体に基づき、1987年に新亜属新種として記載されたもので<sup>1)</sup>、発見のいきさつについては笠原(1987)の記述がある<sup>2)</sup>。本種は同属の既知種とは形態・生態ともにいちじるしく異なる。体が扁平で前体部が小さく、暗赤褐色をおび、小さな複眼と細長い触角をそなえ、附節の背面には顕著なしわがある。発見の端緒となった一頭は、地表のごく平凡な環境で得られたが、本来は、もっぱら涸沢の地下浅層やガレ場の礫層中に生息しているようで、きわめて特異なものである。

本種は当初、石鎚山系に固有のものかと思われていたが、その後、伊東は、新たに四国カルストおよび高知県幡多郡十和村にて本種を採集し、四国西南部にも分布していることが判明したので報告する。



シコクヒラタナガゴミムシの分布地；○既産地，●新産地。

2♂♂，愛媛県上浮穴郡柳谷村猪伏（四国カルスト），28. v. 1988，伊東善之採集。

シオジ，ブナ，チドリノキ等の多い落葉広葉樹林内の標高1150 m 付近の涸沢の礫土中（深さ20～40 cm）より採集された。

1♂，高知県幡多郡十和村奥大道，10. ix. 1988；1♂3♀♀，同前，11. ix. 1988，伊東善之採集。

いずれも、谷沿いに点在するガレ場の礫層中より採集された。現地は四万十川水系の一支流の源流付近で、採集地点の標高は、1♂が650 m，1♂2♀♀が680 m，1♀♀が930 mであった。

1) KASAHARA, S., & Y. ITÔ, 1987. Kontyû, Tokyo, 55: 139-145.

2) 笠原須磨生, 1987. 北九州の昆虫, 34: 181-186, pl. 13.

(高知県高知市，伊東善之；  
千葉県船橋市，笠原須磨生)

## アサヒナコマルガムシを岐阜県天生湿原で採集

アサヒナコマルガムシ *Anacaena asahinai* M. SATÔ は、SATÔ (1982) によって“Ozegahara”（群馬県）および“Yutorinuma”（宮城県）で採集された標本に基づいて記載された種である。本種は高層湿原の池塘に生息することが知られているが、基産地以外での採集例を聞かない。

筆者は岐阜県吉城郡河合村にある天生湿原（標高1400 m）において本種を採集することができたので報告する。

16頭，岐阜県吉城郡河合村天生湿原，15～16. v. 1987，長谷川道明採集。

報告にあたり、本種を同定していただき、いろいろご教示いただいた名古屋女子大学の佐藤正孝教授に厚くお礼申し上げます。なお、標本は8頭を佐藤教授が、5頭を岐阜県博物館が、3頭を筆者がそれぞれ保管している。

## 参考文献

1) SATÔ, M., 1982. The Coleoptera of the Ozegahara Moor. *Ozegahara*, pp. 379-408.

2) 佐藤正孝, 1985. ガムシ科. 原色日本甲虫図鑑, 2, pp. 209-216, pls. 38-39. 保育社.

(岐阜県博物館，長谷川道明)

## ○オオキノコムシ3種の採集記録

少し古い記録になるが筆者は採集例が少ないと思われるオオキノコムシを若干採集しているので記録しておきたい。

1. キベリハバビロオオキノコムシ *Tritoma pallidicincta* (LEWIS)

7頭，北海道江別市西野幌，6. vi. 1982.

5～6月頃に山地のキノコに普通に見られるオオキノコムシであるが、保育社の原色日本甲虫図鑑(Ⅲ)では分布は本州、四国、九州となっている。既に記録されているかもしれないが念のため記録しておく。

2. ヨツボシホソオオキノコムシ *Dacne maculata* CHÛJÔ

多数，北海道恵庭市黄金町，6. viii. 1982.

北海道から本州の中部地方まで局所的に記録されているオオキノコムシであるが、いずれの地でも採集例は少ない。上記の記録は恵庭駅前の古い材に生えていたキノコから採集したものが数百頭も群がっていた。

3. ズアカホソオオキノコムシ *Dacne funorum* LEWIS

2頭，群馬県片品村東小川，13. vi. 1981.

本種も採集例の大変少ない種で、筆者は北海道、青森、栃木、福井県から各1～2例しか記録を見ていない。上記の採集地はカミキリ類の好採集地として知られている大沢の土場で、重なりあった材の奥に生えていた *Laetiporus* 属と思われるキノコから採集した。(東京都世田谷区，沢田和宏)



クロヤマアリの巣から採集された  
日本新記録のヒゲブトチビシテムシ\*

西川 正明

筆者は最近、アリの著名な研究者である久保田政雄氏より、小田原の酒匂川畔のクロヤマアリの巣室から同氏が採集した1頭のヒゲブトチビシテムシを恵与された。調査の結果、僅かな点で諸記載と異なるもの、ヨーロッパに広く産し、モンゴル (SZYMCZAKOWSKI, 1971) からも記録されている *Colon (Myloechus) appendiculatum* (SAHLBERG) と同定できたので、日本新記録として報告する。なお再記載中には下記の略号を使用してある。HL=頭長; HW=頭幅 (複眼を含む); PL=前胸背板長; PW=前胸背板幅; EL=上翅長; EW=上翅幅。

本文に先だち、久保田政雄氏は浅学な筆者に貴重な標本を恵与され、文献をも貸与された。ここに厚く御礼申し上げたい。また戸谷研二氏にも文献入手でお世話になった。記して感謝の意を表する。

アリスヒゲブトチビシテムシ (新称)

*Colon (Myloechus) appendiculatum* (SAHLBERG)

SAHLBERG, 1834, p. 94 (*Catops*); TOURNIER, 1863, pp. 148-149, pl. 5, figs. 12, 12a-c; CZWALINA, 1881, p. 312; MARSEUL, 1884, pp. 127-128; REITTER, 1884, p. 69; GANGLBAUER, 1899, pp. 153-154; HATCH, 1928, pp. 221-222; KEVAN, 1947, pp. 256-259, figs. 9, 19, 29 & 39; SZYMCZAKOWSKI, 1969 a, pp. 326-328, figs. 37-42; 1969 b, pp. 15, 17, figs. 30, 32, 34-36 & 39; 1971, p. 57; PEEZ, 1971, p. 240, figs. 16 a-b.

雄。体は長楕円形で中高。上面はやや長い金色臥毛におおわれる。頭部は黒色、頭楯も同色; 触角1-5節は赤褐色、6-11節は黒色; 口器は黄褐色; 脚は赤褐色; 前胸背板は暗い赤褐色で、小楯板の後部は、少し暗色; 体下面は赤褐色。

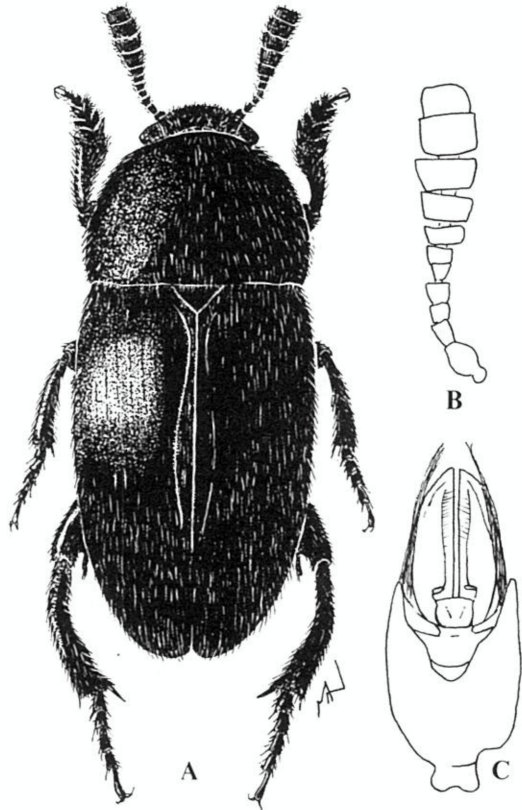
頭部は均一に、しかも強く密に点刻される。頭楯前縁は切断状。複眼は突出し、表面に短毛を備える (HL/HW 0.78); 触角 (図B) は8-11節がクラブ状となり、7-10節は比較的長い毛を備える。1-11節までの長幅の比は次の通り (長: 幅), 4: 3; 1: 1; 3: 2; 1: 1; 1: 2; 1: 2; 3: 10; 2: 3; 4: 7; 1: 2; 3: 5。小腿末節は細く尖り、前節の約7/10の長さがある; 両眼間の幅は眼の直径のほぼ3.6倍。

前胸背板は台形で、強く隆まり、一様に強く点刻され、点刻は頭部のものよりやや大きい; 側縁は軽く弧状、中央後で最も幅広い; 前角は丸く、後角は角張り、後方に突出する; 前縁はやや中央部が彎入し、基縁は中央部が広く多少後方に引き伸ばされ、両後角直前は、強く彎曲する (PW/HW 1.94;

PW/PL 1.28)。小楯板は三角形で、前半は上翅と同大の点刻を疎に備え、後半は密に点刻され、縁に毛を備える。

上翅は、浅い条線が、それぞれ8本認められ (第1条線は明瞭)、間室は浅い点刻を横ひだ状に備える。点刻は前胸背板のものより多少小さい; 側縁は広く弧状、基方1/3で最も幅広い。側縁は縁どられるが、翅端前で終る (EW/PW 1.12; EL/PL 2.23; EL/EW 1.55); 上翅側片の基半は幅広く、基部付近は上翅と同大の点刻が疎にあり、中央部がへこむ。後半は基部よりも密に点刻され、毛を備え、翅端前で終る。下翅はある。

前脛節外縁は、ほぼ直線状で、先方に5-6本の太短い剛毛を備える。頂部は中央部が深く刻まれ、外



アリスヒゲブトチビシテムシ (新称) *Colon (Myloechus) appendiculatum* (SAHLBERG), A: 全形; B: 触角; C: 交尾器背面。

\* M. NISHIKAWA, A new record of *Colon appendiculatum* (SAHLBERG) (Colonidae), found in a nest of *Formica japonica* MOTSCHULSKY, from Japan.

角は突起状となるが、その先端は鈍く、内角部には 1 本の太い刺を有する。内縁は先端に向かい拡がり、強く内側に曲がる；前跗節の 1-3 節は強く拡がり、特に 2 節目は大きく拡がる。4 節は小さく、5 節は単純；後腿節は銃床形、内縁の先方約 1/3 に斜めに突出する突起があり、その先端は切断され、剛毛を備える。内角部は短く伸長し、その先端もやや切断状となる；後脛節外縁は強く弧状を呈し、内縁は強く彎曲する。中・後腿節は強く拡がらない。

腹節は 5 節が認められ、交尾器は図 C の通り。体長 3.59 mm (常態で 2.81 mm)；体幅 1.37 mm。

検視標本：1♂，神奈川県小田原市中曽根，9. x. 1980，久保田政雄採集。

採集状況：本種を採集した久保田政雄氏から採集時の状況をお知らせいただいているので、ここに書き留めておきたい。小田原市中曽根地区の酒匂川の河原で、砂地に営巣していたクロヤマアリ *Formica japonica* MOTSCHULSKY の巣の巣口をけずり取った後、吸虫管をさし込み吸い取ったところ、働きアリ、幼虫、まゆ、蛹に混じて本種が採集された。

## 引用文献

- CZAWLINA, G., 1881. Beiträge zur Kenntniss der Gattung *Colon* und beschreibungen neuer arten. *Dtsch. ent. Z.*, 25: 305-319.  
 GANGLBAUER, L., 1899. *Die Käfer von Mitteleuropa*, 3, 1046 pp., Wien.  
 HATCH, M.H., 1928. Siphidae II. In JUNK, W. & S. SCHENKLING (eds.), *Coleopterorum Catalogus*, (95): 63-244. W. Junk, Berlin.

## ○山梨県のヨコヤマヒゲナガカミキリ

山梨県におけるヨコヤマヒゲナガカミキリ *Dolichoprosopus yokoyamai* (GRESSITT) の採集記録は、大月市小金沢林道での 1 例のみが知られている。筆者は同県 2 例目にあたる標本を所持しているので記録しておく。

1♀，東山梨郡大和村竜門峡入口付近 (1100 m)，1. viii. 1988.

この個体は灯火 (水銀燈) に飛来したものである。

(東京都日野市，中村芳樹)

## ○東京都高尾山でアメイロカクホソカタムシを採集

カクホソカタムシ類は体が小さいために採集例をあまり見ないが、筆者はカクホソカタムシ類の中でも採集例がより少ないアメイロカクホソカタムシ *Philothermus pubens* (SHARP) を東京都八王子市高尾山で多数採集しているので報告しておく。

12 頭，15. viii. 1987；7 頭，22. viii. 1987；3 頭，15. iv. 1988.

採集したのは麓に近い南側斜面で、ハイキングコース脇にあったカシ類と思われる巨大な倒木の樹皮下から採集した。筆者は本種の記録を神奈川、福井、広島、福岡の各県からしか知らないが、東京都からは初めての記録になると思われる。

(東京都世田谷区，沢田和宏)

KEVAN, D.K., 1947. A revision of the British species of the genus *Colon* HRBST. (Col., Cholevidae). *Ent. month. Mag.*, 83: 249-267.

MRASEUL, S. DE, 1884. Précis des genres & espèces de la tribu des Silphides de L'ancien-monde. *Abeille*, 22: 1-204.

PEEZ, A. VON, 1971. Familie: Colonidae. In FREUDE, H., K.W. HARDE & G.A. LOHSE (eds.), *Die Käfer Mitteleuropas*, 3, pp. 237-243. Goecke & Evers, Krefeld.

REITTER, E., 1884. Bestimmungstabelle der europäischen coleopteren, 12. Necrophaga (Platypyllidae, Leptinidae, Silphidae, Anisotomidae und Clambidae). *Verh. nat. Ver. Brünn*, 23: 3-122.

SAHLBENG, C.R., 1834. *Insecta fennica, dissertationibus academicis A. 1817-1834 editis*. viii + 519 pp., Helsingforsiae. (未見)

SZYMCZAKOWSKI, W., 1969 a. Die mitteleuropäischen arten der gattung *Colon* HERBST (Coleoptera, Colonidae). *Ent. Abh., Dresden*, 36: 303-309.

———, 1969 b. Colonidae. *Keys for the identification of Polish insects*, 19-Coleoptera, 14. 28 pp., Warszawa. (In Polish.)

———, 1971. Catopidae und Colonidae. Ergebnisse der zoologischen forschungen von Dr. Z. KASZAB in der Mongolei (Coleoptera). *Ent. Bl., Krefeld*, 67: 47-61.

TOURNIER, M.H., 1863. Traduction de la Monographie des Colons d'Europa, de M. le Dr. KRAATZ, travail accompagné d'observations et de figures. *Ann. Soc. ent. Fr.*, ser. 4, 3: 133-158, pls. 4-6.

(神奈川県座間市)

## ○ヤマトモリヒラタゴミムシ愛知県にも産す

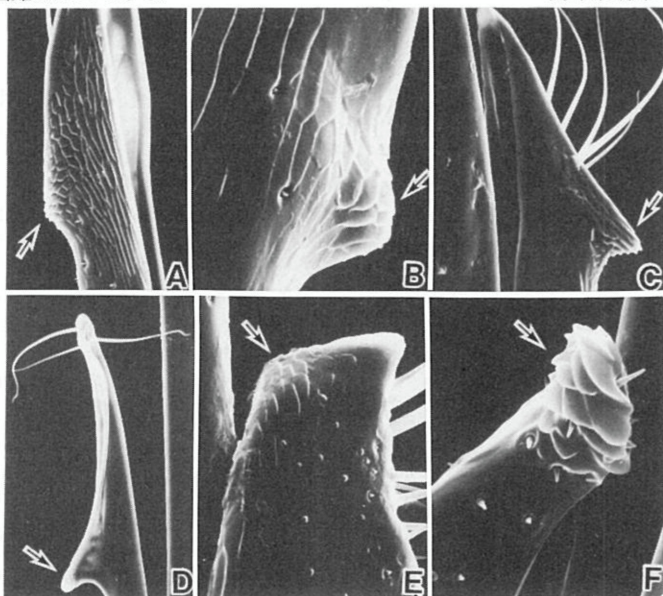
ヤマトモリヒラタゴミムシ *Colpodes (Oncostylus) yamatonis* (HABU, 1975) は、奈良県の大台ヶ原山や国見山をはじめ、和歌山県の護摩ノ壇山に至る紀伊半島各地の標本に基づいて記載された種で、これまで、紀伊半島以外では知られていなかった。ところが、最近、筆者が岩崎 博氏から同定を依頼された愛知県産のゴミムシ類の中に本種があり、これによって愛知県北部まで分布していることが明らかとなった。知見のとばしい本種の分布例として記録すべきもなので、岩崎氏の了解を頂いて、ここに報告しておく。

5♂♂，2♀♀，愛知県設楽町段戸裏谷，11. x. 1981，岩崎 博採集；2♂♂，愛知県津具村茶臼山，22. vii. 1984，岩崎 博採集。

本種は、ホソモリヒラタゴミムシ *C. (O.) speculator* HAROLD に色彩や外形がよく似ているが、前胸背板の形態が異なり、後角がより明らかに角ばっている。雄交尾器はいちじるしく相違し、識別は難しくない。ちなみに、愛知県産のホソモリヒラタゴミムシも見ているので、地域的には両者の分布が重なっていることもわかった。末尾ながら、興味深い標本を検査する機会を与えて下さった岩崎博氏に厚くお礼申し上げる。(千葉県船橋市，笠原須磨生)

○Ampedinae 亜科のコメツキムシ雄交尾器の変異について

Ampedinae 亜科のコメツキムシ類の雄交尾器の特徴の一つに、側片末端の三角形形状部の外縁基部が多少とも鋸歯状の段刻を呈することがあげられる。最も典型的な形は *Ampedus* 属 (図 C) のものであるが、*Megapenthes* 属やその近似の属では変異が多様で、どの形が基本的であるのかを知ることは容易ではない。それは、この系統のものは東南アジア地域に多くの種を分化させていて、日本やその周辺地域の種をみただけではその実体をつかむことが困難なためである。



雄交尾器側片の末端部の鋸歯部は、三角形に拡大した外縁の基部に生じている (図 A~D の ↑印)。*Ampedus* 属やこの近属の側片末端部の形状はほぼ一定していて、鋸歯状部の生ずる位置や形状なども相互に類似している (図 C) が、*Megapenthes* 属やその近属の種では、側片末端部の形状は変異が多く、鋸歯状部の生ずる位置も一定していない。しかし、末端部が三角形をしたものは、常に外縁の基部周辺に生じている (図 A, B, D) が、そうでないものは内側の肩角部に生ずるもの (図 E) や末端部に生ずるもの (図 F) などがあり、これらは側片末端部の変異により鋸歯状部の位置がずれたものと考えられる。

また、鋸歯状部の内側面は通常不規則なひだが見られ、ときにきわめてよく発達したものが存在する (図 A, B)。筆者は前述した鋸歯状部の形態と表面のひだの形状などを総合して考察することにより、これらのグループの属または種間の構成課程がある程度追求できるのではないかと考えている。ここでは参考のために若干の例を示した。

図 A はクロサワツヤケシコメツキ (*Megapenthes kurosawai*)、図 B はホソキコメツキ (*Hayekpenthes pallidus*)、図 C はアカハラクロコメツキ (*Ampedus hypogastricus*)、図 D はアマミニセツヤケシコメツキ (*Swadapenthes amami*)、図 E はカデサハソソキコメツキ (*Procraerus variegatus*)、図 F はサトウツヤケシコメツキ (*Abelater satoi*) の側片末端部を示した。

(岡崎国立共同研究機構, 大平仁夫)

○触角3本をもつヒゲコガネ

通常の1対の触角のほかに、左頭部にさらに1本、合計3本の完全な触角をもつヒゲコガネ *Polyphylla laticollis* LEWIS, ♂を採集したので記録しておく。

触角3本中、正常な1対は図の左右に見られるもので、中央の1本が余分なものと考えられる。同触角は左複眼の斜め右前の触角孔より生じ、正常の触角より複眼に近い。柄節は正常なもの約3分の2の大きさ、柄節を除いた柄部の長さはほぼ同長、片状部 (鰓状片) の長さは正常よりわずかに短いが完全、7葉よりなる。データなど下記のとおり。

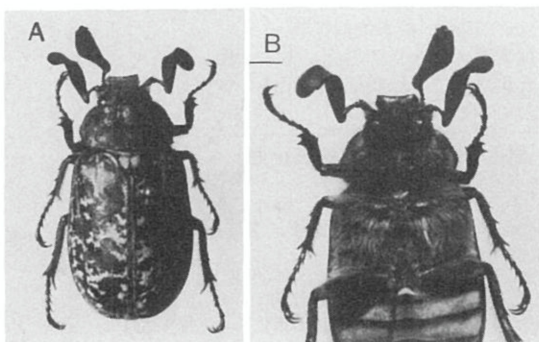
ヒゲコガネ *Polyphylla laticollis* 過剰触角をもつ♂ (図 A, B)

神奈川県厚木市, 23. vii. 1987, 森下和彦採集。体長 32 mm。触角の長さ (屈曲したまま), 左より各々 9.3 mm, 9.2 mm, 9.4 mm。

同日は燈下に飛来したかなりの数の同種♂♀を採集したが、同♂の異常に気付いたのは帰宅後、整肢の際で、残念ながら同個体の生態についてはとくに

観察していない。

末筆ながらこの報文発表をすすめられ、いろいろご教示いただいた黒沢良彦博士、採集についてお世話になった中村進一氏に厚く御礼申し上げます。



(神奈川県逗子市, 森下和彦)

## ○ゴミムシ類5種の分布記録

次の5種は分布域ではいずれも少なくない種であるが、新たな分布限界にあたる、あるいは記録の無い地域において得られた標本を検査することができたので報告しておく。

## 1. ツヤムネマルゴミムシ

ツヤムネマルゴミムシ *Oxyglychus laeiventrus* (BATES) は、日本固有種で本州、四国及び九州に分布し、北海道からは初記録となる。

2♂♂1♀, 北海道上ノ国町矢淵 (標高 800 m), 16. v. 1987, 松本英明採集。

採集地は右股川沢上流の峠付近で、採集個体は立枯れた樹木の朽ちた樹皮の下より見いだした。

## 2. アシミゾヒメヒラタゴミムシ

アシミゾヒメヒラタゴミムシ *Agonum thoreyi* DEJEAN は、日本では亜種 *nipponicus* が北海道および本州に分布し、これまでの南限は神奈川県である。

1♀, 静岡県磐田市岩井桶ヶ谷沼畔 (標高 7 m), 16. vii. 1988, 石川 均採集。

採集地は磐田原台地の東縁部にあるコナラ林に囲まれた沼地で、採集個体は沼の縁に設置したライト・トラップに飛来したものである。この記録は、本亜種の南限および西限にあたる。

## 3. イクビモリヒラタゴミムシ

イクビモリヒラタゴミムシ *Colpodes modestior* BATES は、日本固有種で北海道から九州および屋久島に分布する、原色日本甲虫図鑑 (II) (田中, 1985) では分布域から北海道が抜けているが、森 (jezoensis 6, 1979) による北海道 (厚田村および札幌市定山溪) の記録がある。

1頭, 北海道旭川市神居町春志内 (標高 150 m), 2. viii. 1987, 松本英明採集。

採集地は石狩川流域の渓谷で、採集個体は外灯に飛来したもので、この記録は、本種の北限にあたる。

## 4. シベリアマルガタゴミムシ

シベリアマルガタゴミムシ *Amara majuscula* CHAUDOIR は、日本では北海道および本州 (東北北部3県および福井県) に分布し、本州中部からの記録は無かった。

1♀, 長野県茅野市北山糸萱 (標本約 1,000 m), 9. ix. 1988, 松本俊信採集。

採集地は八ヶ岳西斜面にある水田、野菜畑に囲まれた集落内で、採集個体は屋内の蛍光灯に飛来したものである。

## 5. キノコゴミムシ

キノコゴミムシ *Lioptera erotyloides* BATES は日本 (北海道〜九州)、台湾、中国南部およびインドシナに分布し、これまでの北限は基産地の一つである北海道の 'Junsai' であった。

1頭, 北海道苫前町霧立 (標高 200 m), 26. vii. 1987, 松本英明採集。

採集地は古丹別川上流域にある土場跡で、採集個体はダケカンバの伐採木の樹皮下より見いだしたものである。この記録は本種の北限にあたるが、採集例はあるものの北海道の記録は原記載 (1883年) 以来のものである。(北海道旭川市, 松本英明; 東京都目黒区, 松本俊信)

## ◇お知らせとご挨拶◇

○83/84号をお届けします。本号をもって、甲虫談話会発行の「甲虫ニュース」の最終号といたします。目下、41〜84号の総目次の編集が柴田泰利氏によって進められています。ご期待ください。

○「甲虫ニュース」は、明年 (1989) からは、新たに発足する日本鞘翅学会の邦文会誌として、従来どおりの体裁 (B5版8頁, 年4回) で発行されます。本紙の顔ともいべき表紙のカットは、すでに木村欣二氏の力作が準備されています。ご期待の上、これまでどおり、積極的な投稿をお願いします。

○甲虫談話会の例会と採集会は、新学会の年間行事として、これまでどおりの開催が予定されています。ふるってご参加ください。

○新発足を機に、本誌の編集世話人の一部が交替いたします。新年度からは、岡島秀治・阿部光典両氏が担当しますので、よろしくご依頼申し上げます。あわせて、これまで多大のご協力を頂いた甲虫談話会会員各位に、心からの謝意を表し、ご挨拶といたします。(世話人一同)

## 甲虫談話会

会費 (一ケ年) 3000円, 次号は1989年3月下旬

発行予定 投稿〆切は2月末日

発行人 上野俊一

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

電話 (364) 2311, 振替東京 0-60664

印刷所 創文印刷工業株式会社

## 昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針 00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭 W 針も出来ました。その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 東京 (3) 21129

電話 (03) 409-6401 (ムシは一番)

FAX (03) 409-6160

(カタログ贈呈) (株) 志賀昆虫普及社

## タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥5,000, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,700, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3個以下 ¥1,300, 4個以上 ¥850 (以下同様), 第2地帯 ¥1,500, ¥950, 第3地帯 ¥1,700, ¥1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥60)

## タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25

電話 (03) 811-4547, 振替 6-113479